きもの文化検定公式教本 II の改定について

公式教本Ⅱ「きもののたのしみ」は初版が 2007 年に発行されました。
改訂版発行に伴う修正箇所は以下の通りです。

ページ	表題・該当部分	正	誤
P11	京友禅	友禅染の始祖、宮崎友禅斎の銅像は、	友禅染の創始者、宮崎友禅斎の銅像は、
P11	京友禅	友禅染の始祖とされる宮崎友禅斎は、京都・祇園に住んでいた扇面絵師で、彼の図案を元に創案された友禅は、	初めて友禅染を行ったのは、京都・祇園に住んでいた扇面絵師、宮崎友禅斎です。彼が創案したといわれる手法は、
P12	糸目置	もち米とぬかに蘇芳を	もち米とぬかに赤の染料になる蘇芳をで菅繍(すがぬい)
P17	刺繍	削除	で菅繍(すがぬい)
P31	製紋	図案をコンピュータに読み込み、タッチペンを使って製紋している様子。左の写真の「紋紙」1000 枚が 1 枚の FD に収まるのは画期的なこと。	紋意匠図をコンピュータで読み取り製紋する。写真左のような膨大な量の紋紙情報が 1 枚のフロッピーディスクに収まるのは、やはり画期的なこと。
P31	製紋	現在では「ダイレクトジャガード」の開発により、コンピュータを使って文様を織るようになりました。	かつては短冊形のボール紙で作ったものが主流でしたが、現在は「紋紙フロッピー」が活躍。
P31	製紋	短冊は 1000 枚前後必要という。	短冊は 900 枚前後必要という。
P54	全国きもの主要産地マップ	秋田県　　秋田畝織	秋田県　　秋田畦織
P57	長板中形	削除	なこの技法は重要無形文化財に指定されています。また、あまりにも高度な技術なので、
P54	東京染小紋	天井には長板を乾燥させるスペースがある。	天井には予備の長板を置くスペースがある。
P61	染と織りの産地 愛知―有松・鳴海絞	東海道の有松で、三河木綿を使って絞った蜘蛛絞り、手筋絞りの道中手拭を土産	東海道の宿場町だった鳴海で、三河木綿を使って有松で絞った豆絞の道中手拭を

		物として売ったのがその始まりです	土産物として売ったのがその始まりです。
P67	染と織りの産地 茨城・栃木―結城紬	削除	このほか、夏向きの「結城紬」もあります。
P73	博多織	華皿	花皿
P79	本文	孵化して吐糸までが約一ケ月弱ほどです。	孵化して吐糸までが約一ケ月ほどです。
P79	糸が出来るまで ①絹糸は蚕の繭から作られます	蚕を育て生糸を作る養蚕製糸の技術は、	蚕を育て生糸を作る養蚕製紙の技術は
P79	蚕の一生	人工孵化	人口孵化
P86	糸ができるまで④ 藤布	弥生 の時代から作られていたため、	縄文 の時代から作られていたため、
P93	④糸に撚りをかける	細い糸のまわりに別の太い糸が巻きついたもの	太い糸のまわりに別の細い糸が巻きついたもの
P96	白生地ができるまで ⑥セリシンを取り除く	精練液は炭酸ソーダなどの	精練液は岩酸ソーダなどの
P112	茶系 香色	削除	襲色目にも、「表香色、裏青」とされています。
P116	黄色 鬱色　うこんいろ	ショウガ科の	ミョウガ科の
P133	きものの模様	「歳寒三友（さいかんさんゆう）」	「歳寒三友（さんかいさんゆう）」
P155	女性用きものの標準寸法	合褄幅　160 cm 3 寸 7 分～4 寸（14～15 cm）	合褄幅　160 cm 3 寸 7 分～4 分（14～15 cm）
P157	きものの仕立ての種類	裾回しだけをつけて仕立てた胴抜き（胴ひとえ）という方法もあり、汗をかきやすい人向きです。	裾回しだけをつけて仕立てた胴ひとえという方法もあり、汗をかきやすい人におすすめです。
P164	帯揚げ（1 段落目）	きれいな形を作る 効果もあります。	きれいな形を作る ことが出来ます。
P171	①アドバイスをする	看板のイメージから、シミやカビのついたきものや帯を修復してくれるところを想像してしまいますが、	看板のイメージから、しみやカビのついたきものや帯を修復してくれるところを想像してしまいますが、
P171	①アドバイスをする	「どうしてもシミが落ちないけれど、気に入ったきも	「どうしてもしみが落ちないけれど、気に入ったきも

		のなのでどうにか着る方法はないものか」	のなのでどうにか着る方法はないものか」
P171	本文	胴裏ににそれぞれ渋札をつけ、お客さまの情報、きものの種類、加工内容などを記入して、	胴裏にそれぞれ渋札をつけ、お客さまの名前や日付、きものの種類などを記入して、
P172	④きものを洗う	染め直しをする場合は、表地と八掛の「色抜き」をして、生地を白くしてから染める 。地色を濃くするときには 、色抜きが 不要の場合がある 。	染め直しをする場合は、表地と八掛の「色抜き」をして、生地を白くしてから洗う 。地色だけを変える場合は 、色抜きは不要。
P177	目次	華皿	花皿